

科学？それとも宗教？インテリジェント・デザイン -生命はどのように生まれたのか-

著者	安居 光國
雑誌名	Rikatan : 理科の探検
ページ	98-101
発行年	2017-10
URL	http://hdl.handle.net/10258/00010042



● 特集 オカルト・超常現象を科学する!

科学?それとも宗教? インテリジェント・デザイン

生命はどのように生まれたのか

安居 光國

YASUI Mitsukuni

特集

インテリジェント・デザイン

インテリジェント・デザインとは、生命をはじめ地球上、宇宙などのすべての現象が壮大な未知の知性によって設計されたとする説です。人類がどのようにして生まれたかを題材に、進化論と創造説そしてキリスト教の科学観を織り交ぜながら、インテリジェント・デザインを解説したいと思います。

科学と宗教

まず、お断りしたいことは、筆者の姿勢です。科学は真理を探究するものであり、探求によって得られる知見は日々増え続けるものです。これに対し、宗教は信仰のもとになる経典に書かれている内容あるいは教義に忠実なものです。そのため、ここではインテリジェント・デザインと関係が深いキリスト教も解説しますが、宗教そのものについては議論しません。

宗教と科学は敵対するものではありません。教義は何千年たっても絶対的なものです。なぜ別世界のものが結びつくのか。その理由は、ある宗教にとって、科学が教義の正当性を証明してくれるものと考えたからです。つまり、科学的な証明を証拠に、人の信頼を得ようとしたからです。



わかりやすい

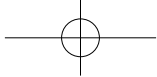
インテリジェント・デザイン

ときおり宇宙から地球に到達する電波に対して、「この規則性を持った電波は、偶然では生まれえない」と、地球外の生命体の存在をにおおすコメントを聞くことはありませんか。このように、わたしたちは理解できない現象や現在の理論で説明できない事象に接したときに、ロマンチックに人類を超える知性に原因を求めることがあります。そうはいつても、真剣に未知の知性あるものを想定して、それを森羅万象の設計者とするのがインテリジェント・デザインです。

聖書は欧米の常識

日本でも米国でも、政治と宗教を分離して、信仰は個人の自由です。ところが、アメリカを見てみると歴代の大統領はすべてクリスチャンです。現大統領のトランプ氏は愛読書を聖書だと公言するほどです。宣誓においても義務ではありませんが、聖書に手を置きます。

アインシュタインの名言“Before God we are all equally wise and equally foolish. (神の前において我々は平等に賢く、平等に愚かである。)”のように神という言葉が普通に用いられています。また、紙幣には“IN GOD WE TRUST (我々は神を信じる)”と印刷されています(図1)。そのため、米国には、キリスト教的な「見えざ



る国教」があると言われています。



図1 1ドル紙幣の裏

米国民の信仰に関する面白い統計があります。それによると、米国の科学者の約4割が神の存在を信じており、1916年から80年も経過した1996年でもほとんど変化がなかったそうです(表1)。これがなんと科学雑誌の最高峰であるNature(ネイチャー)に載っていたため、ウォールストリートジャーナルを通して広く一般に伝えられました。

表1 米国科学者の信仰変化

	1916年	1996年
神を信じている	41.8%	39.3%
信じていない	41.5%	45.3%
懐疑的	16.7%	14.5%

この論文の著者であるラーソン博士は、その反響に驚いたのか1998年に、今度は米国アカデミーの会員であるリーダー的な科学者に限定して分析しなおし、もう一度Natureに発表しました。すると、リーダー的な科学者が神の存在を信じる割合は、非会員の科学者に比べて低く、1998年には1割を切ったそうです(表2)。残念なことに、後者の情報をマスコミが取り上げることはありませんでした。

また、調査会社のギャラップ社によっても、科学者は一般人と違い創造説をほとんど信じて

表2 米国のリーダー的科学家の信仰変化

	1914年	1933年	1998年
神を信じている	27.7%	15%	7.0%
信じていない	52.7%	68%	72.2%
懐疑的	20.9%	17%	20.8%

いないのですが、インテリジェント・デザインを信じる割合は科学者も一般人も差はなく4割もいたそうです(表3)。これこそ、インテリジェント・デザインが持つ魅力のためなのでしょう。

表3 創造と進化の意識調査(1991年)

Gallup 調査 1991年

	科学者	一般人
人類は創造された	5%	46%
神のガイドのもと進化した	40%	40%
進化に神の関与はない	55%	9%

ダーウィンは

ダーウィンは、エディンバラ大学で医学と地質学を学んだ後、ケンブリッジ大学でキリスト教神学に進み聖職者になろうとしました。そのため、彼が神を信じ、創造説のもとに立っていたと考えるのは当然です。しかし、ダーウィンはもっとも興味のあった博物学のもとで多くの実証に触れ、進化論にたどりつきました。もちろん、ガリレオ・ガリレイが地動説を唱えて異端扱いを受けたことを知っており、教会からの反発があることを予想していたため、慎重に進化論を発表したようです。そして、第六版までの改訂の過程で多くの意見に耳を傾けて、第六章「私の学説の難点」、第七章「自然選択説に対するさまざまな異論」などを加えました。また第十五章「結論」では、「本書の第一版が出

版された当時は、創造説が一般通念だったのである。」と状況を振り返り、「これらの学者たちは、創造という奇跡に等しい行為に対して、…」と創造説の学者たちに立ち向かった苦勞を述べています。

ローマ教皇の対応

「種の起源」が出版された 1859 年当時のローマ教皇はピウス 9 世でした。教皇は「この学説は歴史にも、全ての伝統にも、科学にも、観察された事実にも、そして理性そのものにも矛盾していますから、反論する必要がないように見えます。」と無視しました。

1894 年の第 3 回カトリック国際会議・人類部会で進化論研究が採択され、カトリック教会は、進化論の無視から容認に転換しました。

1950 年ピウス 12 世の回勅(かいちよく)「フマニ・ゲネリス」を断片的に引用すると、「自然科学の領域においてさえも十分に証明されていない進化論と呼ばれている学説」と、進化論は科学的でないとは批判的です。しかし、「人体の起源を、すでに存在していた物質から発達したものと探求するだけであれば、教会の教導職は『進化論』の教えを禁じない」と進化論は学問に過ぎないと置き、教皇庁は「進化論」を容認し、その研究を継続しました。

ついに 1982 年、教皇庁科学アカデミーは「種形成や進化的変化の機構といった問題について意見の相違があることを、われわれは率直に認める。しかしながら、膨大な証拠によって、進化の概念をヒトや他の霊長類に適用することに深刻な議論の余地が無くなったことを我々は確信している」と進化論を承認しました。さらに、ヨハネ・パウロ 2 世は 1996 年の総会に向けた書簡で「新たな知識によって私たちは、進化論は単なる仮説にとどまるものではない、と認めるに至っています。」と明確に伝え、これが

世界を揺るがしました。

ただし、ローマ教皇が創造説から進化論に移行したと読み解いてはいけません。カトリック教会が伝えたいことは、ローマ教皇はつねに最新の科学に目を向けており、科学的な判断で「進化論」も一つの学説として認めるに足りると述べたにすぎません。

聖書派の見方は

キリスト教には多くの学派があり、ひとくりに語ることはできませんが、一般の方にはカトリック教会とプロテスタントがわかりやすいでしょう。前者は聖書(神の言葉)のほかに聖伝(説明し普及するもの)も教えの源泉にしますが、後者は聖書のみです。聖書派にとってみ

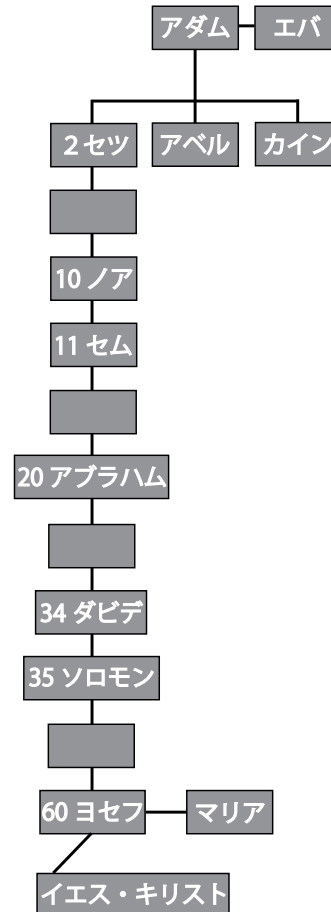
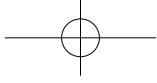


図 2 アダムの系譜(数字は世代数)



ると、聖書に書かれていることに何かを加えることも何を削ることもできませんので、神が人類を生んだという創造説は絶対です。

ところが信仰を持つ科学者は、多くのジレンマに遭遇します。とくに創造の6 daysのすり合わせのため、多くの妥協説が生まれました。

- ・約40億年前の原始生命の誕生を押し込めるために、聖書上の1日は数億年とする説。
- ・創造の6 daysの後、あるいは間に数億から数十億年あったとする説などが現れては消えました。

ちなみに、聖書からアダムの誕生は紀元前3,761年となり、人類の年齢は約6,000年程度と計算されています。なんと、アダムは930歳まで生きたそうです(図2)。

無視できない進化論

進化論の懐疑派から出されている疑念は多岐にわたります。例えば、年代測定法に対する疑念、ミッシングリンクに相当する化石が発見されないことなどです。もちろん、これらに対する進化論派からの科学的な反論も多くありますが、その溝は長く埋まりませんでした。

しかし、世界に発信されたローマ教皇の「進化論」容認発言に支えられ、聖書の記述のジレンマを信者科学者が解消する手段を探るようになりました。その1つとして、複雑な進化の過程は偶然によるものではなく、自然淘汰を大いなる力、未知なる知性によって設計されたものとして解釈することでした。これが、インテリジェント・デザインが欧米で受け入れられる理由と言えるでしょう。

科学か宗教か？

多くの科学者が自然の摂理を探求し続けていますが、まだまだ多くのことが解明できていません。このような未知の問題に面したときに、

科学的な言い方では、「既知と未知を明確に区別し、未知の問題に解を与えるように努力する。」です。ところが、その未知の部分に対し、根拠が不明瞭なまま、「未知なる力」「未知なるもの」がどうこうしたと擬人的に扱々と科学的と言い難くなります。マスコミが面白おかしく言うのは自由ですが、科学者を名乗る者が言うべきではありません。そして、この未知なる力を神と言い切ったとたん、その発言は科学と言えず宗教になります。

宗教サイドから言うと、神が人類に神のみわざを科学的に理解できるようにしているのはごく一部であるという思いもありますが、筆者は科学と宗教は別であると考えています。

主な参考文献

- ・E.J.Larson and L.Witham, Scientists are still keeping the faith, Nature, Vol.386, pp435-436, 1997
- ・E.J.Larson and L.Witham, Leading scientists still reject God, Nature, Vol.394, pp313, 1998
- ・Science Resurrects God, The Wall Street Journal, Dec. 24th, 1997
- ・松永俊男、カトリック教会と進化論、桃山学院大学キリスト教論集、35号、pp51-65、1999
- ・C. ダーウィン、新版・図説・種の起源、東京書籍(原著第六版を人類学者のリチャード・リーキーがわかりやすく訳し、図版を加えたもの)
- ・宇佐和通、インテリジェント・デザイン、学研
- ・鶴浦裕、進化論を拒む人々、勁草書房
- ・ドン・バットン編、『創造』の疑問に答える、バイブル・アンド・クリエーション(聖職者のための本であるため、気安く手にとるにはいけない)
- ・聖書(新改訳)、日本聖書刊行会
筆者は新旧約聖書を何度も通読しました。(やさしい日常語で読みたい方には「リビングバイブル」を薦めます)

プロフィール

やすいみつくに
室蘭工業大学工学研究科バイオコース
進化と切っても切れないバイオ研究者。「遺伝子工学」「技術者倫理」などを講義しています。